

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04091

研究課題名(和文) 乳幼児による社会的行為産出をめぐる理解可能性と共感の達成

研究課題名(英文) Intersubjectivity and empathy in caregiver-child interaction

研究代表者

高木 智世 (Takagi, Tomoyo)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00361296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児が他者に向けて理解可能な社会的行為を産出し、それに応じる行為の連鎖を生み出すことがいかにして達成されているのかを、幼児と養育者の自然発生的相互行為場面の綿密な質的分析を通して明らかにすることを目的とした。幼児による、言語形式上は必ずしも「完全」ではない発話であるが故にその発話を通して為される行為の理解可能性が焦点となる3つの具体的現象の詳細な分析を通して、それらの発話が実際には極めて豊かな相互行為環境に埋め込まれており、それを踏まえて産出されているものであること、また、それを適切に参照(分析)する受け手(養育者)との間での相互理解の確立が協同的に実現されていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語発達過程における幼児の発話は、その言語形式のみに注目すると「不完全さ」が目立つが、その発話が産出された状況を細やかに捉えると、むしろ、幼児の状況の理解や他者の視点の獲得を示すものであることを明らかにした。また、自閉症スペクトラム児の一見不可解な発話も、様々な水準でその発話の産出の状況を分析することによって、理解可能であることを示した。こうした視点は、特定の参加者によるコミュニケーション能力の未発達・非定型発達を理由に相互理解の不可能を主張する立場に対して疑問を呈し、相互理解はあくまでも「協同的」に達成されるものであることを主張する。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reveal, through the detailed qualitative analysis of naturalistic data from real-life interactions, how it is made possible for social actions produced by young children to be appropriately understood and responded to by their caregivers. Focusing on three phenomena involving a certain utterance type whose linguistic formulation appears to be more or less incomplete or equivocal about what action is being implemented through the utterance (i.e. utterances consisting of a simple past-tense verb referring to the child's past action, [NP+ wa?]-formatted utterances, and utterances by a child with autism spectrum disorder), this study has shown that all of these three utterance types are produced within extremely rich interactional environments, and when adult participants can appropriately tap into them, they collaboratively establish mutual understanding and engage in developing further interactional sequences with young children.

研究分野：会話分析

キーワード：会話分析 子ども 相互行為 社会的行為 理解可能性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生後3～4年までの限られた期間における劇的な変化を縦断的にとらえようとする研究は発達心理学の領域を中心として数多くあるが、その「変化」をとらえる以前に、その時期の子どもが他者との相互行為に参加する場面において実際に何が起きているのかを、日常的な自然発生的相互行為場面を丹念に分析し、可能な限り厳密にとらえようとする研究は少ない。このことを踏まえ、本研究では、対象児を絞り、一つ一つの相互行為場面を微視的に、精密に分析して、事例研究を積み重ねていくことによって、人間の相互行為を可能にする多様な資源がどのように絡み合い、折り重なって、「いま、ここ」の相互行為場面における行為の産出と理解を可能にしているのか、その実態を経験的手法によって明らかにしていくことをめざした。

2. 研究の目的

上述のような試みは、相互行為秩序を正確に記述する方法として社会学者の Harvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jeffersonらによって創始された会話分析によって可能となる。日本では、近年になってようやく会話分析の手法の正確な理解が広まりつつあり、会話分析の視点による子どもと養育者の日本語相互行為場面の分析は端緒が開かれたばかりである(高田他, 2016)。行為の理解可能性はどのように生み出され、達成されているのか。本研究の第一の目的は、事例の詳細かつ厳密な分析を通して、可能な限りこの問いに答えることである。この第一の目的に向けて研究を進める中で必然的に焦点となる「間主観的理解」の成否は、とりわけ養育場面においては、発話者(幼児)の発話の仕方のみならず、むしろ、会話参加者の間で協同的に達成されるものである。子どもと養育者の相互行為場面における間主観性のありようを、互いに相手を一個の主体として受け止め合う「相互主体性」の関係として提示した鯨岡(2006)の視座を引き継いで経験的研究として発展させる。分析者の「印象」や直観の水準を乗り越え、相互行為参加者の志向性を緻密に捉えていくことによって分析を証拠立てていく分析手法を確立した会話分析を用いることによって、鯨岡(2006)が提唱する「相互主体性」を、相互行為の当事者が「いま、ここ」で経験し実践していることの細部に繋ぎ留めつつ、相互行為を組織する原理として記述することをめざした。

3. 研究の方法

本研究は、経験的研究として、乳幼児と養育者や他の家族との家庭における実際の自然発生的相互行為場面を分析する。対象となるのは主に0～3歳の乳幼児である。分析するデータはすでに過去の研究において適切な手続きを経て収集されたビデオデータを用いる。まずは、[乳幼児が養育者に向けた働きかけの行為]-[それに応じる養育者の行為]および[養育者が乳幼児に向けた働きかけの行為]-[それに応じる乳幼児の行為](すなわち、会話分析における隣接ペアの原初的形態)という連鎖が認められる部分に焦点をあて、行為の理解可能性という点において興味深い現象をいくつか洗い出す。そのそれぞれについて、相互行為的環境と相互行為の展開の詳細を会話分析の視点から分析する。

4. 研究成果

本研究は、上述のように、人間が他者に向けて理解可能な社会的行為を産出し、働きかけの行為とそれに応じる行為の連鎖を生み出すことがいかにして達成されているのかを、とりわけ、他者理解が原初的な仕方で行われている現場、すなわち、乳幼児を参加者に含む相互行為場面の綿密な質的分析を通してそのメカニズムを明らかにすることを目的としている。この目的は、雑駁な印象に基づいて一般論として議論するのではなく、調査の焦点を適切に絞り込んで、具体的な現象を通して検証することによって達成できる。本研究では、初年度において広範囲にデータの観察を行って、以下の3つの具体的な現象を掘り下げることにした。1) 幼児が養育者との相互行為において、「～した」という過去の行為に明示的に言及することによって開始される協同的語り、2) 幼児による、日本語の代表的な助詞「は」を用いた「NP+は?」という形式の発話によって開始される連鎖、および、3) 非定型発達児(自閉スペクトラム児)と養育者・支援者の相互行為連鎖における相互理解可能性。以下、その成果について、順次述べていく。

(1) 幼児による過去の行為への明示的言及によって開始される語りの活動

幼児が自らの過去の行為について「～した」と発する行為が、幼児の過去の経験や幼児と共有する過去の経験について協同的に「語り」の活動を生み出す契機として会話参加者に利用可能であることを明らかにした。

日常会話においては、様々な目的で自分の体験などを話題にすることがしばしばあるが、それは、ひとまとまりの構造を持つ「語り」の活動として実践される場合が多い。言語発達過程にある幼児はそのような語りを主体的に展開することは困難である。しかしながら、実際の日常的相

互行為場面においては、幼児の過去の経験についての語りの活動が協同的に実践されることが少なくない。そのような場面を詳細に観察すると、多くの場合は幼児自身、ときに養育者によって、幼児の過去の体験について「～した」というように動詞の過去形を用いて明示的に言及する機会が生じた際に、それが契機となって協同的語りが展開することが明らかになった。幼児は自身の過去の経験について言及することが適切な状況が訪れたことを理解し、そのような状況において過去の経験に「～した」と端的かつ明示的に言及する。それを契機として養育者がさらにそのことについて詳細を質問する連鎖を開始するのである。この連鎖の中で養育者は幼児により具体的な描写を求め、幼児はそれに応じて、より具体的な描写を提供することに志向していることが、参加者たちの発言や身体的ふるまいから明らかである。このように展開した連鎖は最終的に、養育者が「よかったね」「すごいね」というような評価的表現を用いてポジティブな評価を与えることによって収束する。幼児は、こうしたやりとりを養育者と繰り返すことによって、特定の過去の行為に言及する行為が他の参加者を取り込んだ協同的活動を生み出しうることや、そのような過去の行為の報告に対して特定の社会的評価が与えられうること、また、そのことを利用して養育者からの承認・賞賛を得ることが可能であることを理解する。さらには、とりわけその過去の行為が養育者との共有体験の中で生じたものである場合には、それについて養育者と協同的に語る活動は、その経験を家族の歴史として位置付けるものであり、家族という集団における社会化にも寄与しうるものである。

本研究の成果については、国際学会において研究発表をし、また、その研究発表内容を論文としてまとめたものが国際学術誌に掲載された。

(2) 幼児による、日本語の助詞「は」を用いた「NP(名詞句)+は？」という形式の発話によって開始される連鎖

日本語を母語として言語発達過程にある幼児が日本語の助詞「は」を習得する際に、「NP+は？」という発話において使い始めることが多いという事実が、すでに複数の先行研究において指摘されている(Kurumada, 2009; Takagi, 2001; Uno, 2016)。次はその事例の一つである。

- 01 子ホ: ちょっとつけて::? ((DVD プレーヤーのリモコンを母親に差し出す))
- 02 母親: ほら, つかへん. ((DVD プレーヤーに向けてリモコンを操作する))
- 03 (1.7)
- 04 母親: ね?
- 05 (0.5)
- 06 母親: あかんねん. ((リモコンを子ホに返す))
- 07 (0.3)
- 08 子ホ: にいには::? ((「にいに」は同じ部屋で遊んでいる子ホの兄を指す))
- 09 (0.2)
- 10 母親: にいにもつけられへん.
- 11 (1.8)
- 12 子ホ: チーちゃんは:? ((チーちゃんとは、子ホ自身のことを指す))
- 13 (0.5)
- 14 母親: チーちゃんもってつけられへんなあ.
- 15 (0.8)
- 16 母親: おかしいねえ.

子ホは 2 歳 2 ヶ月児で、リビングのテーブルで雑誌を読んでいる母親に対して DVD プレーヤーのリモコンを取り出して母親に差し出しながら 01 行目の発話を産出している。08 行目と 12 行目において、本研究で対象とした「NP+は？」型発話が観察される。

本研究では、まず、幼児がこのような形式の発話を用いる時の相互行為的環境と NP の指示対象の性質の観察を通して、この形式の発話が産出される状況の特徴を捉えた。すなわち、NP の指示対象は、常に受け手にとって特定可能のものであり、1) その場に存在することが期待されるものであるのに「今ここ」では不在であるモノ・ヒト、あるいは、2) 「今ここ」に存在していて、その存在への「気づき」を話者にもたらずモノ・ヒトである場合が多く、また、3) この「NP+は？」形式の発話はしばしば繰り返し連続して用いられる。さらに詳細な分析を通して、上記の 3 つの特徴は、いずれも、受け手に対して「NP+は？」型の発話がどのような行為を実現していて、どのような反応を求めているのかがわかるような手がかりを提供するものであることを明らかにした。つまり、1) においては、NP の指示対象の不在についての説明を求めたり、それを「今ここ」にもたらずことを要求しているものとして受け手(養育者)に理解される。2) においては、「今ここ」で生じていることとの関係においてその特定のモノ・ヒトに焦点化する理由を探索することを求め、その理由に応じた反応を要請するものとして受け止められる。また、3) におい

ては、連続して生じる「NP+は？」型発話の中で言及されている NP の指示対象は、「今ここ」の活動において立ち上げられる、いわば、「アドホック」なカテゴリーのメンバーであり、それがどのようなカテゴリーであるかということも、「今ここ」の活動との関連において容易に理解でき、養育者はそれを踏まえた反応を産出する。上にあげた例において、「にいには:?:?」と「チーちゃんは:?:?」は、「今ここで DVD プレイヤーを再生することが可能かを問うことができる者」というカテゴリーのメンバーである。(この場にはいない父親やビデオを収録しているリサーチャーは言及されない点に注意。) 母親自身も含めて複数のメンバーを含むそのようなカテゴリーが喚起されているからこそ、母親は、「にいにもつけられへん.」「チーちゃんもつつけられへんなあ.」と「も」や「もっと」を用いて反応しているのである(ちなみに、母親については、母親自身がすでに 02 行目において、「つけられない」ことを自ら「実演」して見せている。)

このように、幼児による「NP+は？」形式の発話において言及される NP の指示対象は、何らかの不可解さや説明を要する性質(「今ここ」にあるべきなのに無い、無いはずのものがある、「今ここ」の活動に関連するカテゴリーの特定のメンバーについて適用されることが NP で指示されている別のメンバーにも適用されるのかが不明、など)を有するものである。幼児は、「NP+は？」という発話を用いて、その場で遭遇(発見)した何らかの「不可解さ」を解決するための援助を求めることが可能となるのである。そして、上掲のデータにも見られるように、この発話の受け手である養育者は、どのような「不可解さ」が問題となっているのかを適切に理解し、適切に応じるのである。この意味において、「NP+は？」という発話は、幼児が日常世界の日々の状況における謎を解決し世界を秩序化していく手立ての一つである。このことは、「は」という助詞がまずは「NP+は？」という形式で用いられ始めることが多いという事実に対して一つの説明を与えることにもなる。さらに、従来「トピックマーカ―」、すなわち、トピックを標示する助詞として捉えられてきた「は」自体についても、より正確な記述を提示できた。すなわち、「は」は、「トピック」を標示するわけではなく、「は」が付加された名詞句の指示対象を、受け手はその場の状況にふさわしい仕方で認識可能であるはずだという話者の主張を標示するものであり、「は」の使用は、受け手との間にそのような間主観的理解(相互理解)を確立できるはずであるという話者の確信(受け手に対する信頼)に基づいているのである。この意味において、「は」の使用は、相互行為の根幹を為す、間主観的な理解と(受け手への、相互行為能力保有者としての)信頼に基づくものである。この意味において、幼児による「NP+は？」型の発話の多用は、幼児の言語発達の未熟さの証しではなく、文法的形式としては未完であっても、一つの完結した行為として理解可能であり、上述のような間主観性の獲得を示すものとして捉えるべきである。

なお、本研究は、2018 年より韓国語母語話者である研究協力者も研究体制に迎え入れ、日韓語における主語のマーカ―(「が」/i/ka)およびトピックマーカ―を相互行為的視点から捉え直す共同プロジェクトの一部としても推し進めている。本科研費課題との関連においては、韓国語を母語とする幼児と養育者の相互行為における、日本語の「は」に相当する-nun の使用との比較を含めることによって、日韓それぞれの言語においてトピックマーカ―と呼ばれている言語形式が使用される相互行為環境を精査し、その根源的性質と子どもの行為形成・社会化における役割を明らかにする試みを進めている。2019 年 6 月開催の国際学会(IPrA)では共同プロジェクトのメンバー全員を含むパネルディスカッションを企画し、この共同研究の成果の一部を公開した。現在、このパネルのメンバーで国際学術誌の特集号を提案し、受理されたため、メンバー全員がそれぞれ論文を執筆し、現在投稿中である。

(3) 非定型発達児(自閉スペクトラム児)と養育者・支援者の相互行為における相互理解可能性

この研究テーマは、本科研費課題に着手した当初は予期していなかったが、課題研究期間中に、かねてから関心のあった「コミュニケーション障害」領域における会話分析の手法の可能性を、日本コミュニケーション障害学会の講習会で講演することを依頼されたのをきっかけに、自閉症スペクトラム児と支援者の相互行為場面の分析をする機会を得た。そこでは、本科研費課題の中心的問いである社会的行為の相互理解の可能性が、まさに相互行為に参加する当事者の問題として立ち上がっているのを目の当たりにし、このテーマについても継続して探求していくことにした。2018 年秋にその成果の一部を学術誌において発表した。この論文では、一自閉スペクトラム児が支援者との相互行為においての一見不可解な発話を産出し、支援者の側に困惑をもたらしているように思われる事例を単一事例分析として詳細な質的分析を行った。そして、まず、このような一言不可解な発話は、全くランダムに産出されているわけではなく、自閉スペクトラム児が、相互行為上の何らかのジレンマに陥っていると考えられる特定の箇所が生じていることを示した。このとき、この自閉スペクトラム児は、定型発達者にはあまり見られないような方法を用いてそのジレンマに対処していると考えられる。具体的には、例えば、その場にはいない誰かに語りかけるような発話は、「仮の参加枠組み」を構築し、その参加枠組みの中でのやりとりを通して「今ここ」のやりとりで生じているジレンマを解消しているのである。このことを対象児のふるまいの仔細な分析を通して明らかにした。

相互行為の合理性、すなわち、相互行為を組織する「理にかなった方法」は、多様な人々が参加する複雑な相互行為場面において決して普遍的で唯一的なものではない。会話分析という手

法は、英語会話のデータ分析を基盤として発展したため、英米語文化圏の相互行為において見出された相互行為秩序が「普遍的規範」として位置づけられ、分析の指針となっていると理解されることも多い。しかしそれは誤解であり、会話分析は、常に可能な限り先入観を排除し、どのようなデータであっても、そこに現実社会においてリアルタイムに展開する相互行為が生じている限り、その相互行為の当事者の視点に分析者の視点を重ね、何を指して一つ一つの行為を産出し、相互行為を組織しているのかを問うことが求められる。自閉スペクトラム児との一見不可解に見えるふるまいについても、どのような道筋を辿ればそれが「理にかなった」ものとして記述可能かを精密なデータ観察を通して突き詰めることを分析者に迫るのである。『社会言語科学』掲載されたこの論文は、会話分析の手法が「コミュニケーション障害」研究に適用可能であることを明らかにし、多様性を包摂する共生社会の実現に資することをめざすウェルフェア・リングイスティックスの一つの可能な方向性を示しているものとして評価され、徳川宗賢賞受賞を受賞した。

以上、本科研費課題において設定し、探究したサブテーマそれぞれの成果について述べた。それぞれのサブテーマにおいて焦点とした現象は、一見、大きく異なるように見えるが、いずれも言語形式上は必ずしも「完全」ではない(幼児による)発話であるがゆえにその発話を通して為される行為の理解可能性が焦点となりうるものである。そして、そのいずれにおいても、それらの発話が実際には極めて豊かな文脈・相互行為環境に埋め込まれており、それを適切に分析・参照する受け手(養育者)との間での相互理解の確立が協同的に実現されているその様子を明らかにした。

今後の展望としては、人間の相互行為能力の原初的性質の追究という壮大なテーマを追求する糸口となるような具体的な現象をさらに見出して、詳細かつ厳密な分析に裏打ちされた研究成果を生み出し、撚り合せ、統合していきたい。また、本研究課題「乳幼児による社会的行為産出をめぐる理解可能性と共感の達成」における「共感の達成」という部分についての追究は十分にできなかった。これについては、すでに、「定型発達児同士、および、自閉症スペクトラム児同士の共感の達成」というサブテーマを新たに設定して研究を進めている。

引用文献

- 鯨岡峻 (2006) 『ひとがひとをわかるということ』 ミネルヴァ書房
- 高田明・嶋田容子・川島理恵(編) (2016) 『子育ての会話分析』 昭和堂
- Kurumada, C. (2009). The acquisition and development of the topic marker *wa* in L1 Japanese: the role of NP-*wa*? in child-mother interaction. In: Corrigan, B., Moravcsik, E., Ouali, H., and Wheatly, K (Eds.) Formulaic language Vol. 2. Amsterdam: John Benjamins.
- Takagi, Tomoyo, 2001. Sequence Management in Japanese Child-Adult Interactions. Unpublished Dissertation. University of California, Santa Barbara
- Uno, Mariko, 2016. A usage-based approach to early-discourse pragmatic functions of the Japanese subject markers *wa* and *ga*. *Journal of Child Language*, 43. 81-106.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高木智世	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 相互行為現象としての「コミュニケーション障害」-自閉スペクトラム症児の相互行為上の困難をめぐって-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 348-363
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.19024/jajls.21.1_348	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomoyo Takagi	4. 巻 3.1-2
2. 論文標題 Referring to past actions in caregiver-child interaction in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Research on Children and Social Interaction	6. 最初と最後の頁 92-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1558/rcsi.37384	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木智世	4. 巻 36(4)
2. 論文標題 子どもとおとなのインタラクティブ 「原初的」言語使用の現場から見えること	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学4月特大号	6. 最初と最後の頁 4-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Morita Emi, Takagi Tomoyo	4. 巻 124
2. 論文標題 Marking "commitment to undertaking of the task at hand": Initiating responses with eeto in Japanese conversation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 31~49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2017.12.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 平本 毅・高木 智世・細田 由利・森田 笑・林 誠・増田 将伸・城 綾実・西阪 仰
2. 発表標題 会話分析をどう学ぶか.
3. 学会等名 第42回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoyo Takagi
2. 発表標題 Working out how things are relevant: wa-ending requests in CCI
3. 学会等名 Workshop on Japanese/Korean Language and Interaction Revisiting so-called 'subject' and 'topic' particles from a conversation analytic perspective
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takagi, Tomoyo
2. 発表標題 Talking about past action in child-caregiver interaction in Japanese
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高木智世・森田笑
2. 発表標題 相互行為資源としての「あのー」および「そのー」
3. 学会等名 第41回社会言語科学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takagi, Tomoyo
2. 発表標題 Checking how the social world is ordered: [NP + wa?]-format turns used by young Japanese children
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森田 笑 (Morita Emi)	シンガポール国立大学	
研究協力者	権 賢貞 (Kwon HyunJung)		
研究協力者	金 圭鉉 (Kim Kyu-hyun)	慶熙大学	